

関学のホッケーの現状と方針

陸上ホッケー部 上山恒雄（昭和 41 年卒）

1. ホッケーの歴史

ホッケーの起源は、紀元前 1000 ～ 2500 年頃のナイル川流域やエチオピアで発見された壁画にホッケーをしている姿が描かれており、これらをホッケーの起源とする説が一般的です。

近代ホッケーは 1871 年にイギリスでクリケットを発祥として生まれ、1886 年に英国ホッケー協会が発足しました。クリケットの打つ道具が片面しか使えないことと同じく、ホッケーのスティックも片面しか使えないルールになっています。

日本のホッケーは、1906 年にキリスト教布教のために来日していたウィリアム・T・グレー牧師が、慶応義塾の学生にホッケーを教えたのがはじまりで、その後、陸軍戸山学校、早大、明大、東大にホッケー部ができ、1923 年に大日本ホッケー協会（※現在の日本ホッケー協会）が設立され、第 1 回の全日本選手権が開催されました。関西の大学では、京大や神戸大など国立大学が創部し、その後関関同立を中心とした私立大学に広がっていききました。

世界的には、ヨーロッパ各国及びイギリスと関係の深い国の軍隊、貴族、王室で盛んにホッケー競技は行われた歴史があり、英国のキャサリン妃殿下や日本の故高円宮殿下はホッケー経験者です。そのご縁で、高円宮妃は日本ホッケー協会の名誉会長を務められています。

オリンピック（以下五輪）では 1908 年のロンドン大会から男子ホッケーが正式競技に、1980 年のモスクワ大会から女子ホッケーが正式競技となりました。五輪と前後して、国際ホッケー連盟（FIH）が 1924 年に発足しました。日本代表は、男子代表が 1932 年のロサンゼルス、ローマ、東京、メキシコと 4 回の五輪出場を経験しており、女子は 2004 年のアテネ五輪に初出場して以来、北京、ロンドン、リオデジャネイロと 4 大会連続で出場を果たしています。2020・東京オリンピックには男女共出場をはたしましたが、残念ながらメダルには届きませんでした。現在、世界でホッケー協会やホッケー連盟のある国は、男子で約 120 カ国、女子で約 80 カ国となっており、合わせて各大陸選手権、ワールドカップ、世代別の世界大会も行われています。

国内では日本体育協会に加盟しているため、国民体育大会（国体）と全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の正式競技になっています。その他も世代ごとに、我々が関わる大学の他、小中学生やマスターズなどの全国大会が行われています。男女日本リーグも通年にわたって開催されています。

2. ホッケー競技について

(1) 競技フィールド

100 ヤード (91.4m) × 60 ヤード (54.8m) の広さで、16 ヤード (14.6m) のシューティングサークルがゴール前にあります。

(2) 競技人数

ベンチ入は選手 18 人が登録可能で交代自由です。フィールド内は 11 人で、うち 1 名が GK で防具着用が認められています。

(3) 得点

シューティングサークル内で放たれたシュートが得点になります。

(4) 試合時間

15 分クォーターを 4 本行う場合と、ハーフ 35 分を前後半行う 2 通りあります。国際試合は 2015 年度以降、15 分クォーター制に移行しています。

(5) 主なルールや特徴

- ・ボールがスティック以外の部分（主に足）に当たった場合は反則となります。
- ・スティックがボール以外（主に足）に当たった場合は反則となります。
- ・ボールを打ち上げた場合は反則となりますが、危険でないと審判員が判断した場合は、そのままプレーが続行します。
- ・シューティングサークル内の反則はペナルティコーナーというセットプレーになります。守備はキーパーも含めて 5 人、攻撃側は何人でも人をかけてよいという、ホッケーならではのセットプレーです。
- ・オフサイドはありません。
- ・ボールスピードは、女子で最大時速 130km 以上、男子で最大時速 150km 以上というイメージです。

3. 関学でのホッケーの歴史

(1) 創部～1980 年

関学では 1953 年に陸上ホッケー部が創部されました。初代監督は明大出身の故川島銈先生です。川島先生のご好意で当時の関学は明大の八幡山グラウンドに頻繁に合宿に行き、創部 4 年目に関西制覇、創部 5 年目に全日本選手権に出場しました。

1970 年までの関西学生リーグでは関大と天理大がしのぎを削り、関学は優勝こそ 2 回しかありませんが、常に 2 位 3 位という好位置で戦っており、この頃はインカレの決勝やベスト 4 まで進んだり、オール関学で NHK 杯（※現在の全日本選手権）に出場したりと、華々しい戦績を飾っており、ローマ、東京、メキシコ五輪にも、関学の選手や OB で日本代表候補選手に残った方がいらっしゃいました。

しかし、1970 年代に入ってから、多くの関学体育会各部のように学園紛争によるスポーツ選抜入試の中断の影響で、陸上ホッケー部の戦績は徐々に下降の一途をたどり苦しい時代を迎えます。この頃はまだ関西学生リーグで 1 部に在籍していましたが、1975 年にインカレベスト 4、関西学生リーグ 2 位という戦績を最後に低迷期に入ります。

(2) 1980 年～2000 年

1980 年代には、関西学生リーグ 3 部降格もありました。また、他校と違い推薦で選手が確保できないため、1 部に上がってもすぐ 2 部に降格するなど、この 20 年間はほぼ 2 部リーグに在籍することとなりました。幸いにも、部員不足などの休部といった事態はあ

りませんでした。当時のOBや指導陣は、四苦八苦しなながら現役を叱咤激励していました。

(3) 2000年～現在

1990年代から関学でもいよいよスポーツ選抜入試が再開されるようになりましたが、当初は高校とのルートはなく、故早川正博先輩（1951卒）が手探りで部員勧誘を行っていました。2000年以降は、長田和雄総監督（1970卒）と宮林聰光男女ヘッドコーチ（1990卒）の2人が東西を分担し、さらに松宮弘元日本協会技術委員長（1968卒）の力も借りて、全国ブロック大会の視察を手分けして行いました。

戦績面も、2006年に関西学生リーグ1部昇格後、2008年に初の全日本大学王座決定戦に出場、2011年には秋のインカレで35年ぶりのベスト8、翌2012年には関西学生リーグで39年ぶりの3位、同年インカレで2年連続のベスト8と上向いてきました。

またこの頃、OB内でも女子部創部の機運が高まり、2010年に初代女子部監督に峙朝也君（1999卒）を迎え、神戸三田キャンパスで活動するはじめての体育会となる陸上ホッケー部の女子部を創部しました。

女子部は順調に戦績を伸ばし、2012年には夏の全日本大学王座決定戦と秋のインカレに初出場、大学王座決定戦では初出場初勝利（関学5-2慶大）を成し遂げました。その後も、2013年には関西学生春季リーグで3位に入賞、2年連続で大学王座決定戦ベスト8、インカレも連続出場と着実な成長を続けています。

女子部を創部した2010年以降は、男女合同で早関定期交流戦と慶関定期交流戦を行うようになり、関学ホッケー部は新しい時代に入りました。

現在は、男女とも悲願のインカレベスト4入りと、関学現役チーム初となる全日本選手権出場（※社会人で4チーム、学生4チームの8チームのみが出場できる。）を目指し日夜努力を続けています。

4. 2010年の不祥事経験とその後の関学ホッケー部について

(1) 不祥事の勃発

2010年夏、原付バイクの占有離脱物横領罪により当時男子部の1年生の2人が西宮署に拘留されました。このことは部始まって以来の不祥事となり、同時に3ヶ月の対外試合停止といった懲戒処分も経験することになりました。この出来事は、部の存続を揺るがす大きな事件となりましたが、その後、多方面から様々なアドバイスをいただいた結果、現在の部活動の運営スタイルは以前とは違い大きく改善されてきました。

(2) 指導者側での改善

指導者側で策定した主な整備事項は次の2点です。

・「関西学院大学での学生生活と陸上ホッケー部の紹介について」という冊子を作り、高校の先生、入部者に配布し、事前に一読いただくようにしました。

※本冊子は各高校で活用もされており、翌年度の関学希望者にあらかじめ読ませていただいている高校もあります。また、選手の保護者が当部を理解することにも役立っており、保護者と指導者も非常に良い関係です。

・「スポーツ選抜選手獲得に際するリクルート指針」という冊子を作り、指導陣が同じ

考え、同じ目線で選手勧誘をするようにしました。

(3) 現役部員側での改善

現役男女幹部部員が協力し以下の整備と実行を行ってきました。

- ・「基準単位制度」を設け、計算上卒業可能となる単位数を取得してはじめてベンチ入りと試合出場を許可するようになりました。
- ・「審判員資格」を義務化し、C級審判員資格の全員取得を義務化しています。2012年度には関西学生ホッケー連盟会長から感謝状を授与されました。
- ・「新1年生の受け入れ合宿」を男女全員で4月早々に実施し、部全体の一体感を培える環境作りをしました。

5. これからの関学ホッケー部はどうあるべきか

2021年に東京五輪が開催されました。ホッケー競技については、東京都の大井ふ頭（品川区、大田区）に専用のホッケー競技場が整備されました。ホッケー競技は男女とも五輪に出場出来ました。

しかし、その一方で仮に関学の選手には忘れて欲しくないことがあります。

それは関学の誇りや関学での教えを第一とした「人」として五輪で活躍して欲しいと言うことです。

五輪憲章の中にオリンピック・ムーブメントという項目があります。そこには「スポーツを通じて、友情、連帯、フェアプレーの精神を培い、相互に理解しあうことにより世界の人々が手をつなぎ、世界平和を目指す運動。」と書かれています。これは、五輪に出場できる関学生がいたとするならば、スポーツを通じての「マスターリー・フォー・サービス」の実現と言い換えることができるでしょう。

陸上ホッケー部において、単位基準制度、審判員資格の義務化、新入生の受け入れ合宿を学生自身が発案し立ち上げたのは、「マスターリー・フォー・サービス」の一つの具体的な形だと考えています。これを恒久的に継続することが、さらに重要であると思います。

こういった五輪と関学ホッケー部を有機的に結びつけ、よりよい選手育成を促進する一つの題材として、ジョージア工科大学で行われている、TPP（トータル・パーソン・プログラム）を、今後選手育成の指針のモデルとして、部として研究していきたいと考えています。このプログラムについては、まだ書籍や文献等はあまり出ていないようですので、長期的なテーマとして考えていくつもりです。

我々関学ホッケー部は、今後、如何にその影響力を学生にとってよいものとするか？また、学生を関学が目指す世界市民になってもらうために、どう導くか？を考え続けることが重要であり、非常に大きなテーマです。TPPは理解しやすいテーマであり、メンター制度や文武両道の組み合わせの延長線上とも言えるため理解しやすい活動でもあります。

現実的なところとして、我々は2014年度に新設された神戸三田キャンパスの人工芝競技場と、既存の上ヶ原キャンパスの陸上ホッケー場を、部として最大限努力を重ね良好な状態で維持管理することが最も重要な課題であると思っています。またそれと同時に、関学ホッケー部の原点である諸先輩方との想い、すなわち上ヶ原キャンパスと神戸三田キャン

ンパスを陸上ホッケーを通じてつなぐことにより、現役学生の教育に大いに活用していきたいと考えています。

そして、上ヶ原キャンパスと神戸三田キャンパスの両キャンパスを活動拠点として運営していく部ですから、我々が両キャンパスをつなぐ、一つの架け橋として存在していくことが今後必要であると考えています。

このような身近な活動の延長線上に、関学出身の五輪選手や五輪役員が存在するべきだと仮定するならば、今後我々がやらねばならないことは、非常に多くあるように思います。

そして、東京五輪以降にも、関学ホッケー部は独自のスタイルを持つ部活動として、恒久的に関学、日本、世界、地球上のどこかでその存在感を出し、小さくとも輝きを出し続けることが最も大事なことであると考えています。

6. 学生へのメッセージ

関学の学生生活4年間を通じて勉学を通じて学ばせてもらった事はもちろんの事、スポーツを通じて得た事、特に当時からの生涯の友を得られた事が私の人生に大きく影響を与えてくれた事が宝物と言える事を確信しています。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)